

第5章 まとめ—芋川氏と芋川館跡—

1. 芋川館の構造

2年間にわたる発掘調査で西堀のほぼ全域と南堀の一部を検出した。西堀は内法で南北62m、中央南寄りに幅2mの土橋を持つ。西堀の断面形は箱形であり、堀底には18基の障壁を持つ長方形の土坑（障壁土坑あるいは障壁堅坑）と3基の堀底台を持つ。障壁土坑は堀底台を含めて深さをそれぞれ異にしており、さらに大きさも一様でなく、かつ場所によって障壁土坑を東西に2基併設するなど、堀底は意図的に変化に富ませている。西堀は東側の3分の1ほど未調査のため、東西方向に2基併設がほかにあるか確定できないが、調査状況から障壁土坑SK03とSK04の2基だけと思われる。西堀の西壁は堀の西北隅は検出が不十分であったが、堀底台SX01から土橋SX03をまたいで南側のSK14まで直線的で、傾斜角は45度と急角度である。土塁からの深さは最も深いSK05底部は4.6mである。西堀北西隅のSK01からSK14までの堀幅は外法8mであり、SK14の南の堀底台SX05から西南隅の堀底台SX06までの距離は外法で23m、幅は狭くなり外法6mである。この間には4基の障壁土坑があるが、各障壁土坑は幅広の西堀にあるものに対して比較的浅くかつ底面には凹凸があり、あたかも未完成の状況にある。深さも主郭面からは1.4m前後とこれも浅い。しかし、南堀の障壁土坑SK19は主郭面からの深さは2.3mで堀として十分な深度があるところを見れば、障壁土坑底部の凹凸は幅広の西堀区間にあるものが、平坦に仕上げられているところから未完成とも把握できるが、むしろこれも堀底部を意図的に変化させたものと思われる。

このように西堀は幅と底部は土橋の南SK14を境として北側と西側では異なり、西堀の外側線は鉤形となるところから、SK13に始まる南堀があつて屋敷地が2分され、幅広の堀に囲まれた主郭と幅狭の堀に囲まれた副郭からなる可能性も検討してみた。幅狭の堀が堀幅に限らず、深さや底部に設けられた障壁土坑の底部などの構造上の相違なども考慮に入れた判断である。つまり郭を二重の堀によって囲まれた館とすることであり、類例は飯山市大倉崎館跡に見られる。しかし、郭内部の水田区画にも、堀跡らしい痕跡は見られるが、積極的に堀跡を示す痕跡ではなく、また、SK19に見られるように、南堀の規模は幅広の西堀部分に近いところを見ると、郭内が未調査である現段階では堀の二重構造説は保留し、堀一重説とした方がよいと思われる。

南堀は別章でふれたとおり、公民館裏手に残る土手を土塁の残存とすると、この土手下の線がSK18で確認された南堀北側の延長線と一致するところから、南堀は一部民家の敷地となつてはいるものの、土地地割のあり方からこの部分に存在したことはまず間違いのないものと考ええる。北堀は北側土塁の存在と、その北側の水田地割が周辺と異なり、かつ低いところから従来より北堀の痕跡であろうとされてきた部分にあたる。問題は東堀の位置であり、現状では確定が困難であるが、妙福寺の新規造成墓域としてよい。これはかつて寺域外の水田であったものを寺域に編入し造成されたものであって、墓域の西側の縁線は公民館裏手の土手が直角に曲がり4mほど北に延びた線と一致する。この線が北堀の内側の線——東外郭線となろう。

以上の検討で芋川氏館は、周囲を障子堀と土塁で囲まれた堀内法で東西50m、南北60mの長方形区画の館となろう。東に隣接する妙福寺の寺域はほぼ芋川氏館跡と同規模で、東辺は斑尾川によって区画されるところから、この部分を副郭とする説もある（郷道・臼田1983）。妙福寺は芋川氏一族によって建立されたと寺伝にあり、芋川氏と密接な関係にあり副郭説はあながち否定できないが、可能性であり以下の論は妙福寺副郭説ははずして進める。

また、主郭内部の構造は現在では不明である。米山一政氏は森氏宅地で礎石の存在を確認したというが、今日認めることはできなかった。しかし、列石SX07に礎石と思われる大石が数点認められたところを見ると、主郭

内に礎石建物があつたことはまず間違いない。

土橋はS X03以外に確認されていない。未調査地域内には別にあるものと思われる。土橋に続く堀外も調査したが、門や道路などの痕跡は認めることはできなかった。土橋より北側2mの位置に東西方向の農道がある。現状で幅2mであつて、中世の町屋の景観を残すといわれる町の集落（小林・矢野ほか1980）に続いている。恐らくこの農道が館と町屋を結ぶ旧道で、土橋へは枳形を径て続いていたものと思われる。

以上の検討結果から芋川氏館は主郭が方半町規模で、信濃で初めて確認された障子堀を持つ館であつたといえよう。

2. 芋川氏と芋川館の年代について

芋川氏が文献史料に確実に登場する時期は永禄12年（1569）で、武田信玄の芋川親正にあてた書状が最初である。甲越の戦の中で芋川氏が信玄に重く用いられており、その理由は越後との国境に本貫があつたからである。つまりこの史料から、芋川氏が在地領主として甲越の戦の時点で確実に存在し、重要な役割を担っていたことを知るのである。問題は芋川氏の出現がいつかということである。芋川氏館跡の調査で館跡の構築年代が判明すれば芋川氏の出現問題のひとつの解決になるが、それがすべてではない。在地領主としての芋川氏が館を構えた出現時期を示すにすぎない。

芋川氏館跡の堀からの出土品で、館の年代を示す資料は輸入陶磁器、編年綱が確立している能登産の珠洲焼や東海産の陶器類と2点の北宋銭である。輸入陶磁器の大半は14・15世紀代で珠洲焼も同様である。瀬戸系の鉄釉陶器は15～16世紀代である。つまり、館の構築時期を14世紀代に求めることも可能であるが、北宋銭を含め伝来時期を考えねばならず、これらをもって館の構築時期とすることはできない。むしろ在地産の土器である内耳土鍋と土師器小皿（カワラケ）は土器の性格上ほとんど伝承期間はないとしてよい（笹澤・水澤2001）。特に宴席用のカワラケは使用が1回限りが多いものと思われ、したがってこれらの土器類に年代が与えられれば構築問題解決の早道であるが、信濃のこれら土器類の編年研究はいまだ大系化に至っておらず十分とはいえない。しかし、内耳土鍋については15～16世紀代の年代が考えられる（小林1982・服部1997・1998）。

堀の埋没は慶長3年（1598）の芋川氏の会津移住以降のことである。会津へは百姓を残して小者に至る一族がことごとく移住することになっていたから、移住後の芋川館は完全に無人の地となり、管理もなく堀の埋没は急速に進み、堀埋土と水路での発掘調査の所見から18世紀末頃にはほぼ埋まり、水田造成がなされ今日に至つたものと思われる。

したがって館の出現は、最大にとれば14世紀代に始まり、慶長3年をもって使命が終つたことになる。しかし、後述のように障子堀という防御機能で固めた館の構築は恐らくそれほど古く想定することはできないものとする。内耳土鍋の示す年代——15世紀末から16世紀前半頃の構築時期と考えるが、さらに別の角度から構築時期については後述する。

3. 芋川氏館の性格

発掘調査で判明した北信地方の館跡は決して多くはないが、これらをもとにした市川隆之氏の研究によれば、主郭の規模によって3種があるという。高梨氏館跡（中野市）や栗田城（長野市栗田氏館）などの方1町規模のもの、石川条里遺跡内微高地上の方形屋敷地（市川1997）、飯山市長者清水遺跡（高橋・望月他1985）、同市大倉崎遺跡（高橋・常盤井・高沢1989）などの方半町規模の館と30m規模のものの3種である。これらは14世紀から15世紀代にかけてまず方半町の館が出現し、次いで15世紀後半には方1町（100m）と30m規模のものに分化して、

半町規模（50m）はなくなるという（市川1997）。氏は館の中心建物の敷地（主郭）規模と堀が一重か二重堀かなど多方面からの分析を加えている。方1町規模のものは氏の指摘のとおり有力国人層で文献に登場する有力御家人層の館跡がこれに含まれる。また、大倉崎館跡は千曲川河岸にあり、浸食によって崩壊していることを考えれば方半町規模に含めるべきか検討が必要であるが、出現時期については課題が残ろう。このことは飯山地方の館跡についての松沢芳宏氏の論考についてもいえることである（松沢1993）。年代決定の根拠となる在地生産の土器類についての基礎研究が不十分であることに起因する。

ともあれ、市川氏の研究によれば芋川氏は館規模以上の在地領主であったことをうかがわせる。茶臼と風炉である。これらは館主が茶をたしなんでいたことを示し、中世では地方の有力国人層や寺院のみの風習といわれる。青白磁などの輸入陶磁器以上に茶臼や風炉は有力国人層の威信財である（水澤1999・2001）。信濃の館跡で見た場合にも、風炉は栗田城、飯山市大倉崎館跡（高橋・常盤井・高沢1989）と本例のみであり、茶臼は佐久市大井城跡（佐々木ほか1986）、栗田城、大倉崎館跡、牟礼村矢筒城館跡（米山・矢野1981）など決して多くはない。特に二重に造作された挽手孔を持つ茶臼の上臼はきわめて丁寧な作りである。風炉もまた雲形文を配したものである。このほか、「松と波文」を沈刻した石硯もまた威信財であろう。漆器類や陶磁器類・銭貨に加えて小柄もまた芋川氏が館の規模で示される以上の有力国人層であったことを示している。これらの遺物が館放棄時に廃棄されたという前提に立てば館構築時には有力国人層の次に位置する領主層であった芋川氏が甲越の戦の中でたくましく勢力を伸ばしたことを考古資料は示しているのである。

しかし、出土品で見る限り芋川氏は館規模以上の在地領主であったことをうかがわせる。茶臼と風炉である。これらは館主が茶をたしなんでいたことを示し、中世では地方の有力国人層や寺院のみの風習といわれる。青白磁などの輸入陶磁器以上に茶臼や風炉は有力国人層の威信財である（水澤1999・2001）。信濃の館跡で見た場合にも、風炉は栗田城、飯山市大倉崎館跡（高橋・常盤井・高沢1989）と本例のみであり、茶臼は佐久市大井城跡（佐々木ほか1986）、栗田城、大倉崎館跡、牟礼村矢筒城館跡（米山・矢野1981）など決して多くはない。特に二重に造作された挽手孔を持つ茶臼の上臼はきわめて丁寧な作りである。風炉もまた雲形文を配したものである。このほか、「松と波文」を沈刻した石硯もまた威信財であろう。漆器類や陶磁器類・銭貨に加えて小柄もまた芋川氏が館の規模で示される以上の有力国人層であったことを示している。これらの遺物が館放棄時に廃棄されたという前提に立てば館構築時には有力国人層の次に位置する領主層であった芋川氏が甲越の戦の中でたくましく勢力を伸ばしたことを考古資料は示しているのである。

堀内出土品のうち注目されるものに、多量の手斧による削り屑と薄板ならびに桜皮がある。前者は建築用材の加工がこの地でおこなわれたことを、後者は曲物の製作があったことをそれぞれ示している。石川条里遺跡（市川1997）や辰野町堀の内居館跡（赤沼1995）では館内で鍛冶がおこなわれていたが、芋川氏館でも曲物生産が盛んであったらしい。国人層の館内ではこうした手工業生産があったことを示すものとして興味がつきない。

4. 障子堀とその意義

障子堀は城郭を囲う堀底に障壁・段差・堅穴（坑）などの障害構造物を設けた堀をいう。北条氏長の「兵法雄鑑」（1645）や山鹿素行「兵法神武雄備集」（1642）など多くの軍学書に「堀障子」・「障孔堀」と記載され、小田原の後北条氏の城郭を代表するものとして古来よりいわれてきた。しかし、多くの城館の堀の発掘調査例が増加するに伴い、障子堀が多様な構造を持ち、後北条氏の領国内にとどまらず、広く全国に分布することが明らかにされつつある（中世城郭研究会1998・1999）。すなわち、障子堀は後北条氏の領国である関東一円、伊豆・駿河の東半分にあり、16世紀前期を初源として16世紀中期以降に多く構築される。しかし、領国内の城館であっても、すべてに採用されているものでもなく、持たない城館もある。また、後北条氏の領国以外では東国地方から中国地方まであり、東北地方では米沢市と仙台市に多く見られ、織豊政権系の城郭、例えば大坂城や旧二条城などにも見られ、構築年代も15世紀代から16世紀代にわたりバラツキがあるという（池田1998・1999）。

障子堀は形態的には(A)堀底に堀の壁と平行に障壁を築く、(B)堀の壁と直角に障壁を築くか、(A)と(B)を組み合わせる(C)があり、水堀・空堀に限定されない（池田1998・1999）。

芋川氏館跡の障子堀はすでに明らかにしたとおり、堀の壁に直角に障壁（障壁土坑）を設けたもので、池田氏分類のⅡにあたり、長野県内で初めて検出されたものである。県内の城館の堀の発掘調査は、本例のように全面調査に及ぶことが少なく、多くが断面観察用のトレンチ調査に終わっている。ある程度の面的調査を実施した例は管見にふれる限り10指に満たない。したがって、県内の城館に本例のような障子堀採用の堀がないと断言することはもとより早計であろう。障子堀が後北条氏の城館以外に採用されている以上、今後の県内の城館調査は問題意識を持って望めば、障子堀の発見例は増加するであろうが、そう多くはないであろう。いずれにしても、障子堀採用の直接的契機は城館の防御施設を高めることにあるにしても、情報入手の方法や経路など中世史研究の新たな問題提起がなされたとすることができよう。芋川氏が中世末期において障子堀を採用した背景には、大塔合戦前後の信濃国人層の台頭と深く結びつくであろうし、直接的には甲越の戦に巻き込まれてゆく信濃国人層のひとつの断面として見ることも可能であろう。高梨氏館跡に見られる土塁の改築（中島1993）もまたこのことを示すものであろう。芋川氏館跡の構築時期は再三述べてきたとおり、出土遺物で見る限り14世紀末を上限としそれ以降となる。しかし、この年代は芋川氏の存在時期を間接的に暗示するものであっても館跡の構築時期を示すものとはならない。また高梨氏館に示されるように、当初の館の防御機能を高めるべく箱堀で囲まれた芋川氏館を、のちにさらに防御を高めるために、堀底に障壁土坑を追加工事したとも考えられない。主郭・土塁・土橋などが計画的に一体化されており、また調査所見からも追加工事の痕跡が認められない以上、構築当初から計画的に障子堀を意図した館構築がなされたと考えることがごく自然と思われる。だとするならば、北信地方の軍事的緊張が高まる応永11年（1404）の細川による「下芋川の要害」陥落以降であろうが、障子堀を持つ多くの城館が16世紀に入って構築されているという全国的傾向を勘案するならば、北信地方が戦国的様相を深める永正年間（1504～20）ということになる。永正4年（1507）越後で長尾為景が前守護上杉房能を松之山で滅ぼしたことに端を発する永正の反乱に、高梨政盛は長尾方の先鋭として、北信の泉（飯山市）、市河（下水内郡栄村）、島津（長野市）氏らとともに越後に出兵し、上杉方と争った。恐らく芋川氏も信州党として高梨氏配下のもとに出兵したことが予想される。高梨氏はこれ以降、中野市に居（高梨氏館跡）を構え本格的に領国経営に乗り出すが、更級郡坂城町に本拠を置く村上氏との対立が続き、北信の国人層は高梨党と村上党に分かれて争乱が続くことになる（湯本1987）。芋川氏は恐らく高梨氏党に属し越後とも関係を深めていたものと思われるが史料上の根拠はない。しかし、のちに芋川氏が武田・上杉両氏に戦略上の要地に本貫を持つがゆえに重用されているところを見る限り、この頃にはすでに高梨党の有力武将として勢力を固めつつあったと見てよく、この頃、防御施設を固めた館を構築したと考えるのが妥当であろう。背後の山頂に詰めの城として鼻見城が築かれたのもこの頃であろう。

問題は先行する館がどこにあったかということにある。堀出土の陶磁器類の大半は14・15世紀代のものである。これらは購入当初から芋川氏の所持品と考えた方が自然で、応永11年（1404）細川滋忠によって攻略された下芋川の要害を若宮城とし、この主が芋川氏であったとする小林・矢野氏の説（小林・矢野1980）は十分考えられる。だとするならば、前身の館が若宮城に近い場所にあったと考えてよいが比定地は不明である。

最後に出土品から越後との関係についてふれておく。いうまでもなく、芋川の地は越後との玄関口にあたり交通の要地であったから、越後との関係は深かったとみることはごく自然である。いわんや主家筋にあたる高梨氏が越後の守護代長尾氏と関係深く、越後領内に多くの所領を持っていた（湯本1986）ことを考えれば当然のことといわなければならない。能登産の珠洲焼は東北信地方に広く見られるが、特に北信に多い背景には越後と北信の国人層との関係があったからにはほかならない。越後に信州系の内耳土鍋が出土することも彼我の関係があったからである。しかし、在地産の土師器小皿（カワラケ）は、越後では手づくね成形の京風であって、東国風のロクロ成形は少なく（笹沢正史・水澤2003）北信では逆である（中島1993）。芋川氏館跡でも出土点数は少ないが、

ロクロ成形のみである。これらのことは北信の国人層の基本は東国的である中で越後との関係が保たれていたと見るべきものと思われる。

引用・参考文献

赤沼英男 1995「鉄関連遺物の組成からみた堀ノ内遺跡における鉄器製作とその使用」『堀の内居館跡』辰野町教育委員会

池田光雄 1998「障子堀について」『テーマ「障子堀」について』第15回全国城郭研究者セミナー実行委員会 中世城郭研究会

池田光雄 「障子堀について（発表要旨）」 1999 中世城郭研究 第13号 中世城郭研究会

市川隆之 1994「栗田城出土の遺物と若干の考察」『栗田城遺跡(2)』長野市教育委員会

市川隆之 1997「中世の遺構と遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15—長野市内その3—石川条里遺跡 第1分冊』(財)長野県埋蔵文化財センター

今佐今朝人・百瀬忠幸 1984「鐘山遺跡」三水村遺跡発掘調査報告書 第1集 三水村教育委員会

大久保邦彦 1979「三水村上赤塩遺跡出土縄文中期中葉の深鉢型土器」『研究ノート3 地地研究の動向』千曲川古代文化研究所

小沼英雄・馬場俊二 1980「地勢」『三水村誌』三水村

河西克造 1994「栗田城の地籍図による復元」『栗田城跡(2)』長野市教育委員会

黒岩 隆 1993「市内の遺跡と遺物—縄文時代・中期」『飯山市史』歴史編(上) 飯山市編纂委員会

郷道哲章・白田武正 1983『長野県の中世城館跡—分布調査報告書—』長野県教育委員会

小林計一郎・矢野恒雄 1980「上代・中世」「近世」『三水村誌』三水村

小林 孚 1976「縄文時代」『上水内郡誌・歴史編』上水内郡誌刊行会

小林 孚 「遺跡探訪(4) 上水内郡三水村赤塩遺跡」『長野』第29号 長野郷土史研究会

小林秀夫 1982「御社宮司遺跡の諸問題」『長野県中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』茅野市その5 長野県教育委員会

小山丈夫 2000「戦国時代の太田荘」『豊野町の歴史』豊野町誌刊行委員会

小柳義男 1983「上水内郡三水村遺跡出土の遺物—縄文時代草創期の土器を中心として」『しなのろじい』No200、千曲川水系古代文化研究所

小柳義男 1984「上水内郡三水村岩袋遺跡出土の珠洲系陶器」『埋文雑記帳』長野埋蔵文化財センター(三水村教育委員会『三水村の文化財』1992に再録)

小柳義男・永野稲雄・小林秀雄 1997『上赤塩遺跡発掘調査報告書—縄文中期の集落址—』三水村教育委員会

佐々木宗昭・小山岳夫・羽田卓也 1986「中世の遺物」『大井城跡(黒岩城跡)』佐久市教育委員会

笹澤正史・水澤幸一 2001「伝至徳寺跡の遺物様相—中世前半を中心として」『上越市史研究』第6号 上越市



調査参加者1 (第1次調査)



調査参加者2 (第2次調査)

- 鋤柄俊夫 1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』Ⅲ・38-4 信濃史学会
- 高橋 桂・望月静雄他 1985『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ 上野遺跡・大倉崎遺跡』飯山市教育委員会
- 高橋 桂・常盤井智行・高沢秀徳 1989「大倉崎跡の調査」『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告1』飯山市教育委員会
- 田川幸生 1981「まとめ」『伊勢宮』山ノ内町教育委員会
- 中世城郭研究会・第15回全国城郭研究者セミナー実行委員会 1998「テーマ『障子堀』について」
- 中世城郭研究会 1999『中世城郭研究』第13号 中世城郭研究会
- 寺内隆夫 1991「長野県上水内郡三水村上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌61・62』長野県考古学会
- 戸根与八郎 2003「池田遺跡」『上越市史叢書8 考古一中・近世資料一』上越市
- 中島庄一 1993「成果と課題」『高梨氏館跡一発掘調査報告書一』中野市教育委員会
- 服部敬史 1997・1998「内耳土鍋の研究」上・下『土曜考古』21・22
- 原 明芳 1991「遺物」『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』長野市教育委員会
- 広瀬忠好 1975「長野県上水内郡三水村今田遺跡の有孔鍔付土器」『長野県考古学会誌21』長野県考古学会
- 福島 永 1995「堀と遺物」『堀ノ内居館跡』辰野町教育委員会
- 松沢芳宏 1993「中世の遺跡と伝統的建造物一城館集落遺跡」『飯山市史』歴史編(上)飯山市誌編纂委員会
- 水澤幸一 1999「瓦器 その城館的なもの一北東日本の事例から一」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 水澤幸一 2001「伝至徳寺跡出土の威信財一瓦器と漆器」『上越市史研究』第7号 上越市
- 水澤教子 2000「成果と課題 中期後葉の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24一更埴市内その3一更埴条理遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)一縄文時代編一本文』長野県埋蔵文化財センター
- 湯本軍一 1987「室町幕府政府の発展と信濃」「戦国の争乱と信濃一応仁・文明期の信濃」『長野県史』通史編第三卷中世二 長野県史刊行会
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 米山一政ほか 1981「矢筒城館跡」『長野県牟礼村矢筒城館跡遺跡発掘調査報告書』牟礼村教育委員会